

陽気だより

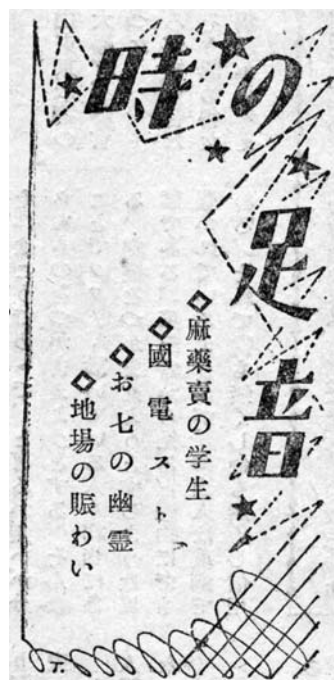
養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 40 2010. 7. 15

第5号(24年9月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で61年を迎えます。過去の記事から、その歩み的一端を振り返っていきます。



麻薬密売の学生

麻薬密売団に多数の学生が入っていたというので、世間を驚かした。東日(※東京日日新聞)の近事片々欄に、世間が驚くだけまだ学生は純真に見られている、という意味のことが書かれてあったが、学生のアルバイトもここまで行つては言語に絶する。

学生はそのすべてを知性の訓練にささげている時なのである。すべてのものを観たり考えたりするのに、理知の世界にもって来なければ気がすまない、そういう時代であり、それ故に純粹さがあると云える。それが学生の持味である。麻薬の密売が、どんなに世

間を毒し、滅亡の道を辿るか位のことは分かりきって居る筈であり、自分等もその為にどういう立場に置かれるかも知りつくしている筈である。

麻薬を売るには、余程自分の知性の方をマヒさせなければならぬ。知性へ麻薬をつぎこんでおいてからでなければ、やり得ないことである。

知性が美しい人間を、善良な世間をつくつて行く、学生はその先陣を承るものであると思う。その学生にこんなことが行われるとは、実に悲しい。

然し、又世間も学費の嵩む学生を思い、将来の日本を考へ、人間の一步步前進のために、学生学徒のアルバイトを真剣に考えてやって欲しい

ものである。

お七の幽霊

八百屋お七の幽霊が夜毎に東京本郷の或る家に出る、というので大騒ぎ、警官まで張込むと云うことになった。

幽霊と云えばつかみどころがない筈なのに、八百屋お七とは誰がそう認め得たのか、云いふらしたのか、場所から考えたのか、それとも人形浄瑠璃のお七の足音にでも似ている、と通の考えたことか。

この頃の世間はつかみどころのないものが好きらしい。それを如何にもハッキリしているように(例えばその幽霊は八百屋お七であるなど)云いたがり、思いたがるのである。

隠退蔵物質(※不正な方法で入手し、隠匿・退蔵した物質)が、どこにあるか、と有る、それはこうであつて、と有るか無いか分らぬものをつかまえようとする。そんなことでフワフワ動いている人も相当にある。幽霊をつかまえようとするような風態である。第三者から見ると、憑物にでも憑かれているようだが、御当

人は真剣である。それで物も無くし金を無くし信用も無くしてふらふらになって戻つて来るのが関の山である。

何か分らぬ物音に、幽霊というまでは未だよいが、八百屋お七とまでハッキリさせて了うところに、どうも現在の人の心を写している気がしてならない。

人間はもつと地道に行くようにしなければ、幽霊に憑かれていような人ばかり沢山居たのでは、人間の話や交際が出来なくなつて来る。

たとえ金儲けでも、欲を出すにしても、人間は人間としての歩み方を反省していなければならぬと思う。



